

中・高校生からみた家庭におけるプライバシーについて

一 棟 宏 子
若 井 希水子

1. 研究の背景と目的

日本において、子ども部屋の必要性が広く一般家庭に意識され始めたのは、高度経済成長期以降であった。1966 年にスタートした第 1 期住宅建設 5 ヶ年計画の目標は「1 世帯 1 住宅」であったが、このように住宅事情が悪く狭い住宅の中で、学歴社会が進展するにつれ、家庭で勉強に専念できる子ども部屋をいかに確保するかが親の課題であった。

それからほぼ半世紀を経て、平成 11 年度全国家庭児童調査結果によると¹⁾、18 歳未満の子どもが子ども部屋をもつ世帯は 66.9% (前回 70.2%) と報告されている。1984 年に実施された調査結果²⁾によれば、子ども部屋は小学校低学年段階で概ね三分の一が与えられ、高学年で大部分が個室を与えられると述べ、親が子ども部屋を与える目的は、「独立心を養うため」「勉強のため」「遊び部屋のため」に 3 分されており、子どもの身辺自立や精神的自律の手段として子ども部屋を与えることが評価されているという。

現実に子ども部屋では就寝、勉強、遊び、楽しみごと等、多様な日常の生活行為に利用されている。中には、家庭における生活の大半が子ども部屋で行われているという極端な例もあるが、特に中学生から高校生の段階になると、子ども部屋に対する意識や使い方が大きく変化し始める³⁾。

そこで本研究では、中学生および高校生を対象に調査を実施し、子ども部屋がどのように使用され、空間とモノ (生活財) をどの程度家族と共有しているか、家族との関係や子ども部屋のありかたについて生徒自身がどのように評価しているかを明らかにし、子ども部屋が青少年のプライバシー意識とどう関わっているかを中心に考察する。

2. 研究方法

2001 年 7～9 月、樟蔭中学および樟蔭高校の教諭の協力を得て、中学 1 年生 99 人、高校 3 年生 123 人、合計 222 人の女子生徒を対象に子ども部屋についてアンケート調査を実施した。調査は授業後に引き続いて調査票を配布し、その場で回答を依頼、回収する方法をとった。有効回収票は中学生 98 (99%) 人、高校生 123 (100.0%) 人であった。

主な調査項目は、① 調査対象の家族構成や生活状況 ② 子供部屋における行為 ③ 家族関係に対する自己評価 ④ 子ども部屋と保有物について ⑤ 子ども部屋を与えられた時期 ⑥ 部屋の自己管理であった。

3. 調査対象の概要

3.1 対象世帯の家族構成

家族人数は、中学・高校生（以下、中高生と略す）とも大差はない。4～5人家族が多く、1世帯あたり平均4.7人であった。家族構成（表1）は核家族世帯の割合が6～7割で最も多いが、中学生の家庭では3世代家族も4割を占めてかなり多い。きょうだいの人数は2人がほぼ半数、次いで3人きょうだいが3割、一人子は15%であった（平均2.2人）。

表1 家族構成

	核家族	3世代家族	その他
高校生※	72.4%	26.0%	1.6%
中学生※※	59.2%	39.8%	1.0%

※ 高校生 n=123

※※中学生 n=99

※（以下表中の対象者数は同様）

3.2 子ども部屋の現状

居住環境をみると、中高生とも戸建住宅に住んでいる世帯が圧倒的に多い（表2）。特に中学生の家庭では戸建住宅が8割と多いのは3世代家族が多いのを反映していると思われる。現在の家には生まれた時から住んでいると答えた生徒が多く、高校生は34.1%、中学生はほぼ半数に当たる。高校生のほうが転居、改築等で居住環境が変化している割合が高い。

表2 居住している住宅形式

	一戸建	集合住宅	不明
高校生	73.2%	26.0%	0.8%
中学生	82.7%	17.3%	-

高校生は全員が子ども部屋を保有しており、中学生でも子ども部屋をもたないのはわずか6人であった（保有率は93.9%）。そのうち個室があるのは中学生76.1%、高校生85.4%、大半が自分専用の部屋を親から与えられている（図1）。はじめは子ども部屋を共有していたが、途中か

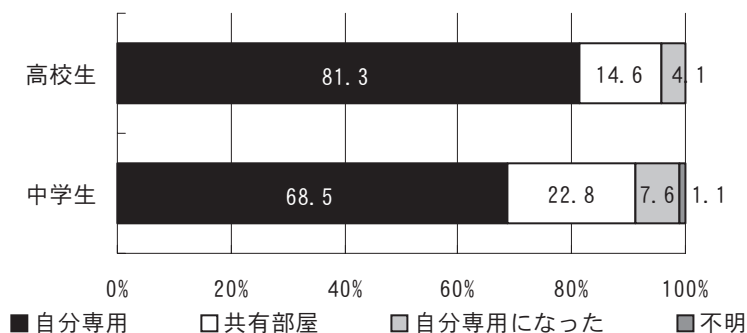


図1 子ども部屋の専有率

ら個室になった例は中学生が7.6%、高校生4.1%あり、その場合の同室家族の男女比はほぼ同数であった。子ども部屋は洋室が約8割を占め、和室のほぼ約4割が洋風に使われている（表3）。広さは6畳⁴⁾が最も多い（図2）。

表3 子ども部屋の様式

	和室	和室を 洋室風に	洋室	その他
高校生	15.4%	11.4%	73.2%	-
中学生	8.7%	5.4%	84.8%	1.1%

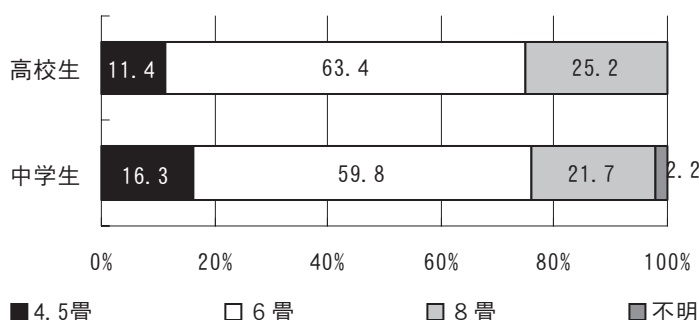


図2 子ども部屋の大きさ

3.3 子ども部屋を与えられた時期

部屋を与えられた時期は、小学校入学前が中高生とも約1/4、中学生は小学校高学年の時が最も多い（33.6%）。高校生では中学校以降に得た場合も17%あった。全体に、子ども部屋の準備は早くからなされている傾向がみられる（図3）。

「使い始めた時期」「親と別に寝るようになった時期」も、中高生とも子ども部屋を与えられた時期とほぼ同じ（76.7%）が最も多いが、現在も親と一緒に寝ている中学生が22.4%、高校生で

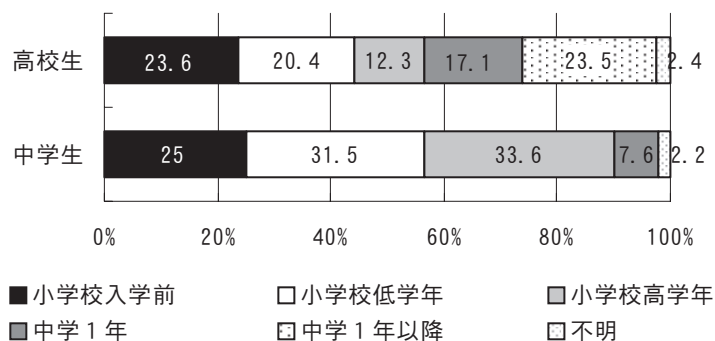


図3 子ども部屋を与えられた時期

は13%と意外に多い。

3.4 子ども部屋の必要性和管理について

「自分専用の部屋がなくてもよい」と答えた人は全体でわずか3人のみだが、「絶対必要」と感じている生徒は6割程にとどまっている。

一方、自室を掃除するのは主に自分と回答した中学生が半数弱、高校生が約6割で、母親に依存する比率は約3割であった（表4）。なお、「その他」には母親と自分という回答が多く含まれ、中学生では24%にのぼっている。ちなみに、文献⁵⁾の中で中学生の母親を対象とした子ども部屋の掃除に関する調査結果によれば、生徒自身が掃除するのは33%で、6割強が生徒と母親が掃除するという回答が報告されている（表5）。今回の調査結果では自分がする比率が高いが、中学生の約半数は母親が掃除にかかわっているとみてよいと思われる。

表4 部屋の掃除をする人

	自分	母親	きょうだい	その他	不明
高校生	62.6%	30.9%	-	6.5%	-
中学生	45.7%	30.4%	2.2%	21.9%	3.3%

※その他：「母親と自分」も含まれる

表5 子ども部屋の片づけと掃除をする人（子の回答）

	自分	片づけ自分 掃除母親	母親	その他	不明
1993 調査	32.9%	57.3%	7.1%	2.7%	-

4. 子ども部屋における生活行為について

家庭で行われる生活行為13項目について、子ども部屋がどの程度使用されているのかを「子ども部屋のみ」「主に子ども部屋で」「主に他の部屋」の3段階で回答を求めた（図4）。

「髪をととのえる」「きょうだいと遊ぶ」「テレビをみる」「飲食」の4項目は、他の部屋で行っている比率が高いが、それ以外の行為は自分の部屋が中心である。特に「ひとりになりたい時」には9割以上が子ども部屋を使用し、中でも子ども部屋のみと回答した割合が中学生68.5%、高校生85.4%と非常に高い。

全般に高校生のほうが自分の部屋のみを使う比率が高い。特に、中高生で差が見られたのは、「寝転ぶ・昼寝をする」「友達を泊める」「電話をする」である。「友人を泊める」では、中学生は友人を家に泊めること自体が少ないためか無回答が1/3強と多かった。「電話をかける」は携帯電話の保有率（中学生63.0%、高校生は91.9%）の違いを反映し、高校生では9割以上が自室で行っている。

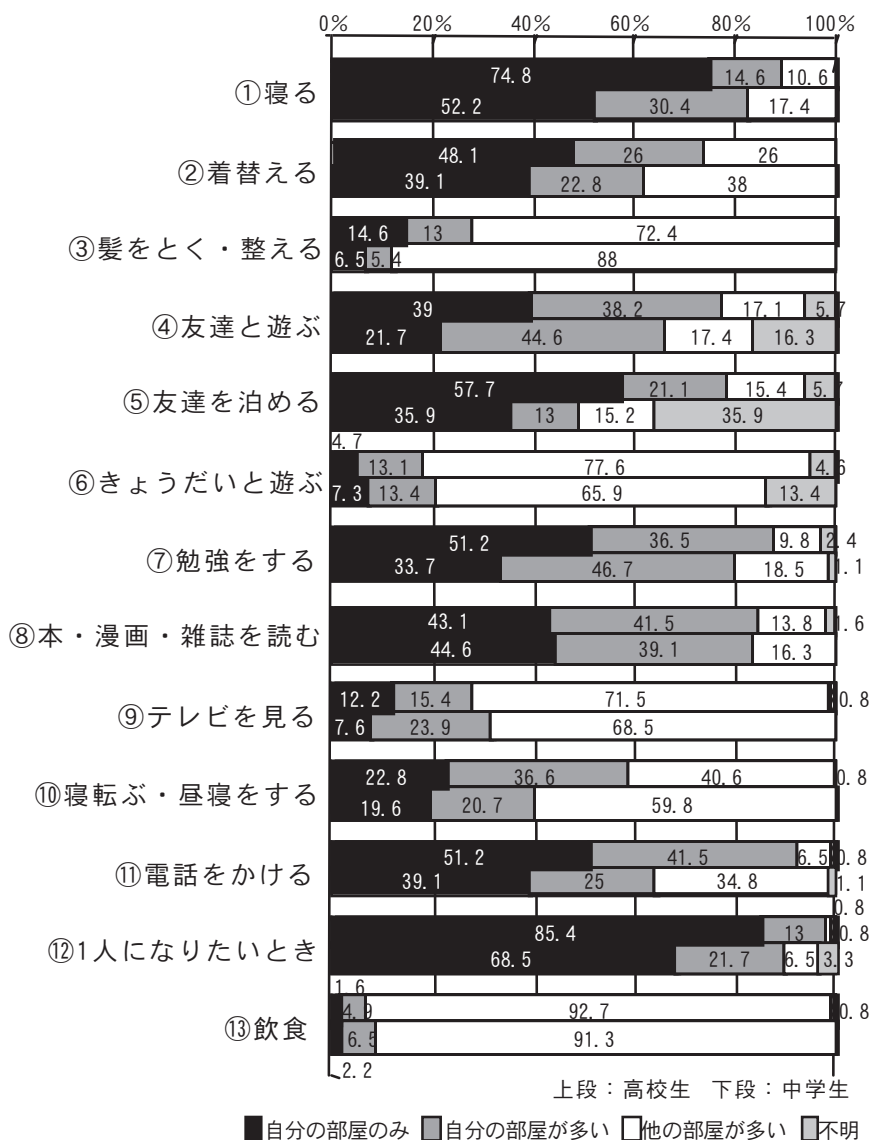


図4 生活行為を行う場所

5. 家庭におけるプライバシー意識について

5.1 子ども部屋の在室時間と家族との交流

ふだん家で過ごす時間は中学生のほうが全般に長い。中学生は13時間、高校生は12時間が最も多い。そのうち睡眠時間を除いて自分の部屋で過ごす時間は、中学生で2時間、高校生で3時間が多かった。家族で過ごす時間と自分の部屋で過ごす時間を比較すると、中学生では7割が「家族で過ごす時間の方が多い」のに対して、高校生ではその比率が半分以下である(図5)。なお、

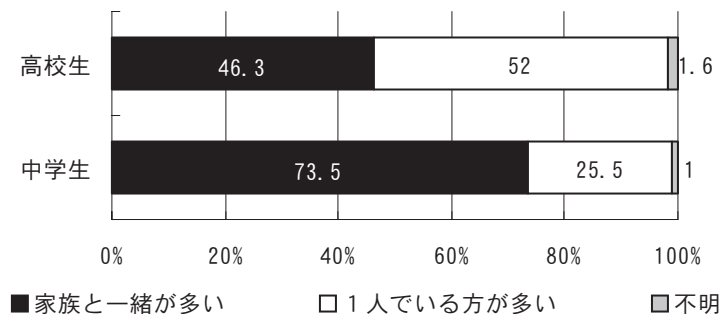


図5 家での過ごし方

家に「1人になれる場所がない」と答えたのは中学生 13%、高校生 7%と比較的少数であった。

「1人になりたいと思う時」の行為をみると、中高生とも「電話をする時」の回答が圧倒的に多い。次いで受験を控えている高校生では「勉強をする時」の比率が高い。「ぼーっとしたい時」は中高生とも周りに干渉されたくないと感じており（図6）、実際、これらの行為はほとんど自

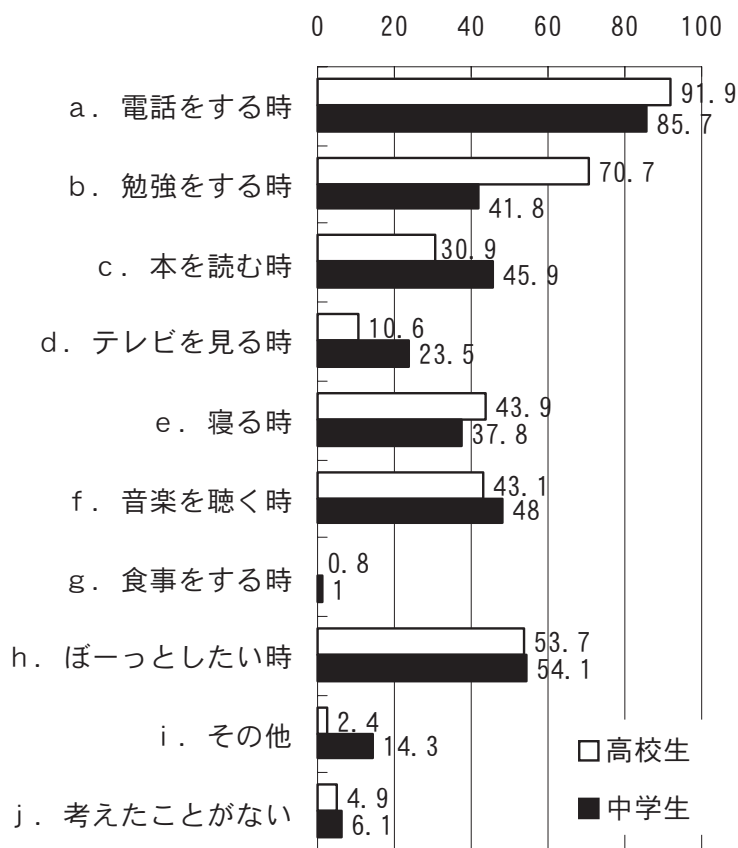


図6 一人になりたいとき

室で行われている。「寝るとき・勉強・電話など」は年齢が上がるにつれて、一人になりたいというプライバシーの要求が高くなっていくことがわかる。

5.2 こども部屋の使いかたと家族の動静の認知度について

家族相互の関係から部屋の使いかたをみた。たとえば、ドアの開閉で家族の動静や気配の感じ方は大きく異なる。在室時および不在時における自室ドアの開閉状態（冷暖房を使用していない時期）をたずねた（図7）。子ども部屋のドアの開閉についてみると、在室時では部屋のドアを閉めている人が多く、中高生の差はみられない。不在時では部屋のドアを開けている人が中高生ともに多いが、高校生のほうがドアを開けている割合は多い。自分専用の部屋のほうが不在時にドアを閉めている割合（45.6%）が10%程度多い。

中学生は高校生よりも、家族が立てる音を気にする生徒が多い（図8）。子ども部屋に鍵があるほうが家族の立てる音を気にする人が多く、音の気配に敏感であるようだ。自室にいないがらたいていの生徒は家族の気配を掴んでいる。逆に、家族が自分のいる場所をわかっていると思うものは9割以上で、互いに家族の動静がわかっているようである。なお、外出時は約6割の生徒が

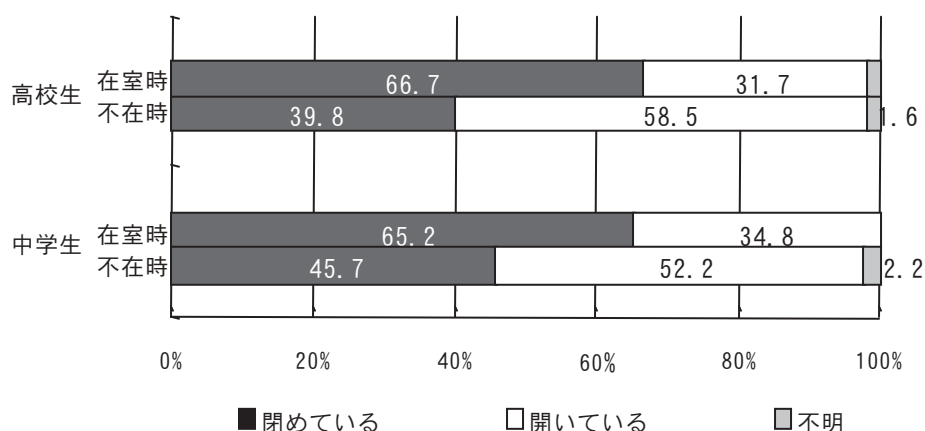


図7 在室時、不在時のドアの開閉状況

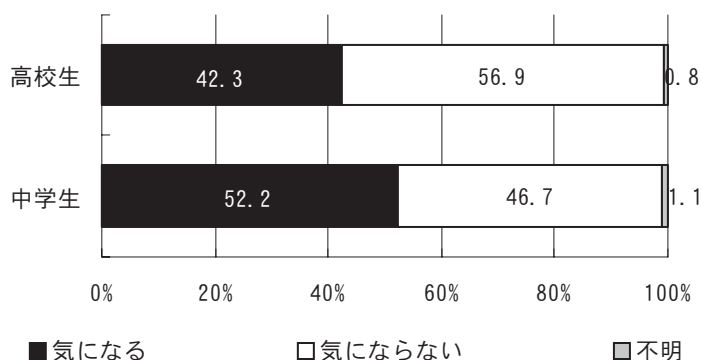


図8 自室にいます家族のたてる音が気になるか

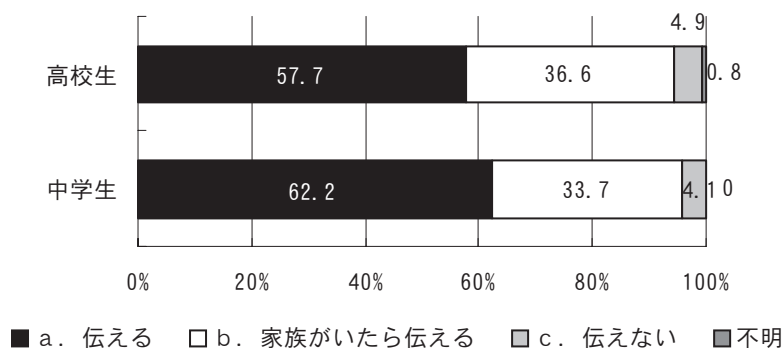


図9 出かけるとき家族に行き先を伝えるか

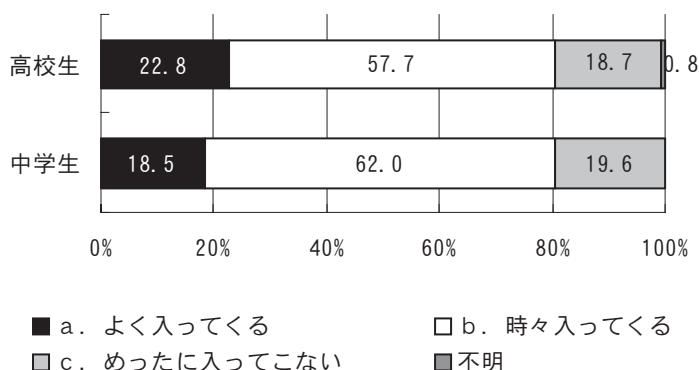


図10 家族の子ども部屋への入室頻度

行き先を告げて出かけている（図9）。

子ども部屋への家族の出入りについてみると、在室時では、中高生ともに結構家族の出入りがある。家族が入ってこないのは中高生ともに2割程度であった（図10）。不在時も中高生ともに「家族の出入りがある」と答えた人が多く、全体に、在室・不在にかかわらず子ども部屋への家族の出入りは多い。中高生とも家族の入室時に合図があるのは比較的少ない（47.9%）。なお、文献の調査結果⁶⁾によれば、親は子どもが在室時には半数以上が入室しないと答えた一方、不在時では9割近くが入室すると回答している。今回の調査結果では子どもの在室時の部屋への出入りが多いのが特徴といえる。

逆に、家族の部屋への出入りについてみると、家族が部屋にいる・いないにかかわらず家族の部屋への出入りしている生徒が全般に多いが、家族がいるときに比べると部屋の主がいないときでも「入る」生徒は少ない。中高生ともに家族の部屋へは、物の貸し借りのために出入りすることが多く、中学生では人を呼びに行くためという回答も多かった。なお、家族の部屋へ入るときに合図をしないで入る生徒が多い（55.5%）。

表6 子どもの在室中の親（家族の）入室頻度

	入室する		入室しない	不明
1993 調査	47.8%		52.2%	－
樟蔭高校	頻繁	時々	18.7%	0.8%
	22.8%	57.7%		
樟蔭中学	18.5%	62.0%	19.6%	－

1993 年調査は田中恒子氏が実施した調査結果より

表7 子どもの不在時の親（家族の）入室頻度

	入室する	入室しない	不明
1993 調査※	86.9%	6.3%	6.8%
樟蔭高校	66.7%	32.5%	0.8%
樟蔭中学	67.4%	32.6%	－

※1993 年調査は親の回答

5.3 家族の行為に対する不快感について

父親、母親、きょうだいに対してどのような行為を不快と感じるのだろうか。①化粧品・ヘアケア用品等の消耗品またはタオル、下着といった直接肌に触れるものを使用される ②本・服・CD等消耗品でないものを使われる ③自分の在室時に合図なしで入ってくる ④電話の内容を聞かれる ⑤家族が下着姿でうろうろする、の5項目について不快感を3つの尺度で回答を求めた。⑥自分の不在時に無断で部屋に入る については対象者を限定せずに選択肢を4つ設けた。

家族の行為に対する不快感（図11）は父親に対して最も強い。行為では「消耗品や直接体に触れるものを勝手に使われる」、「在室中合図なしに部屋に入る」、「電話の内容を聞かれる」ことに対しては高校生のほうが、「消耗品でないものを勝手に使われる」、「家族が下着でうろうろする」、「不在中家族が勝手に部屋に入る」ことに対して、中学生のほうが不快に感じている割合が高かった。

特に、生徒が最も不快に感じるのは「電話を聞かれる」ことであり、家族の誰に対しても約7割以上が不快と感じ、さらに、その半数以上が「許せない」と強い反応を示している。

なお、不在時の家族の無断入室（図12）については中学生は気にしないものが最も多いが、高校生の場合は目的によっては許せるが6割を占めて最も多い。不快に感じているものは両者とも3割弱であるが、中学生のほうが強い不快感を表すものが多い。

6. 持ち物について

中高生ともほぼ全員が自分の部屋に勉強机を所有している（図13）。勉強机の他では、ベッド、

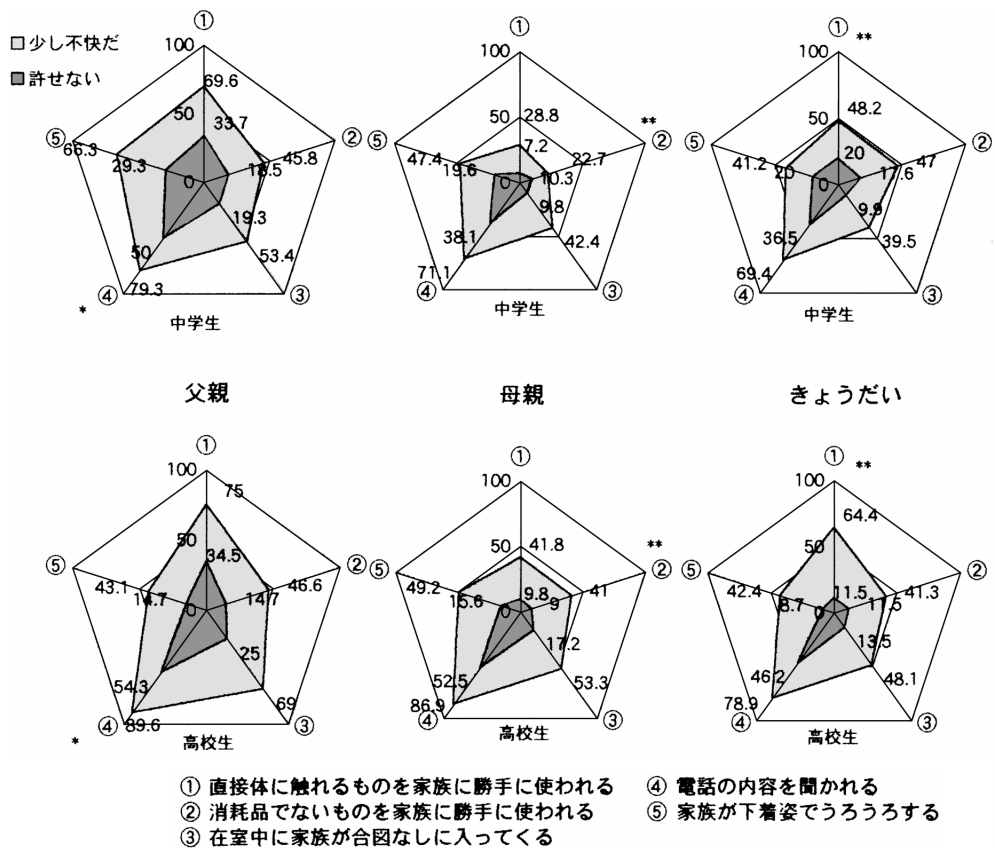


図 11 家族の行為に対する許容度

* カイ自乗検定で 5 %水準で有意差有りを示す
 ** カイ自乗検定で 1 %水準で有意差有りを示す
 (以下表中の * / ** は同様である)

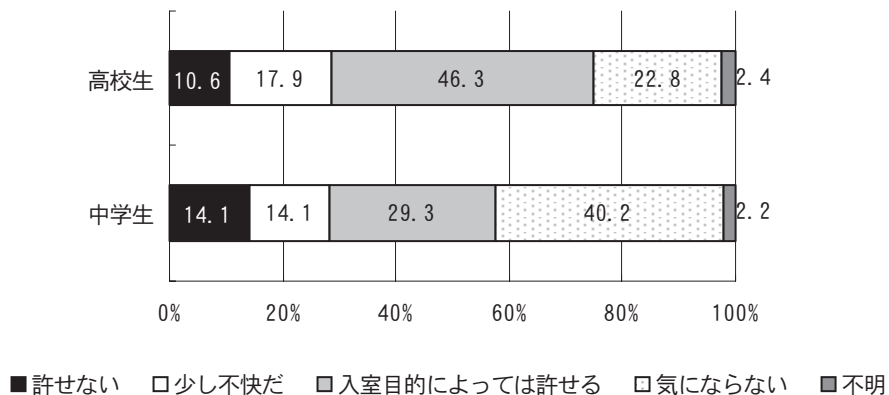


図 12 不在時に無断で入室される

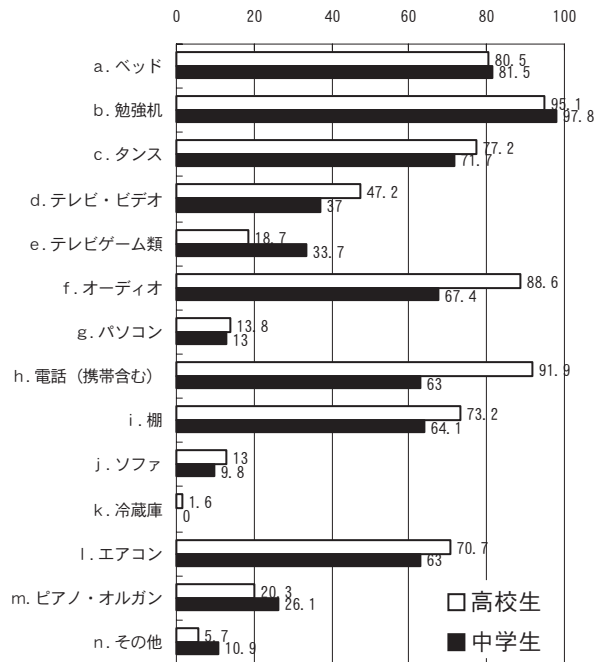


図 13 自分の部屋にあるもの

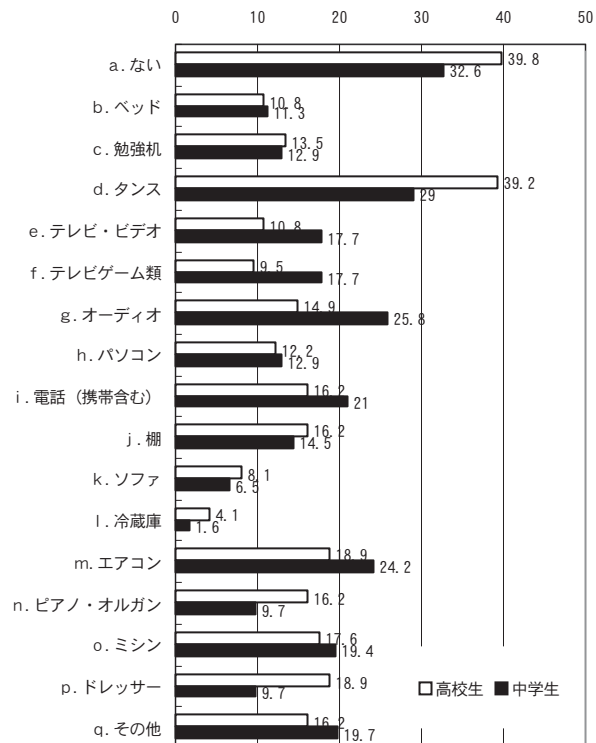


図 14 家族の部屋にある自分の持ち物

たんす、電話、棚、エアコンが6割以上部屋に置かれている。高校生は電話およびオーディオを9割前後が所有し、中学生に比べてその差が大きいのが注目される。部屋にいる時間を長くすると思われるテレビは中学生4割、高校生はほぼ半数が所有しているが、部屋にある電化製品は家族のものにとらえている傾向があるようだ。自分の部屋に家族の持ち物が置いていないケースは全体の4割程度（図14）で半数以上の人の方が何かを置いており、最も多いのがタンスであった。中学生は自分の持ち物を家族の部屋に置いたり、家族の持ち物を自分の部屋に置いたり、使用する傾向が強いことから、高校生のほうが自分の部屋の独立性を保っていると思われる。

7. 子ども部屋の自己評価

家庭におけるプライバシーについて質問した（図15）。「わからない」の回答が中学生で6割、高校でも5割近くあり、全体に中高生が家庭においてプライバシーをさほど強く意識していないことがわかる。中学生よりも高校生のほうにプライバシーが守られていると感じている人が多く、共有部屋の人よりも自分専用部屋の人のほうが、プライバシーが守られていると感じている。家族と過ごす時間が多いものほどプライバシーが守られていると感じている（図16）。不快感において、「家族が下着姿でうろうろする」「不在中家族が勝手に部屋に入る」ことが許せないと答えた人ほどプライバシーも守られていないと感じている。自分が家のどこにいるのかを家族がわかっ

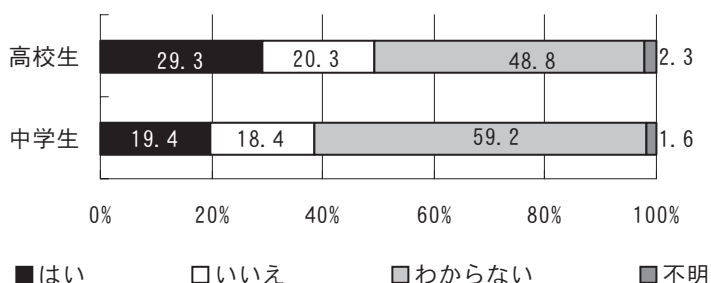


図15 プライバシーが守られているか

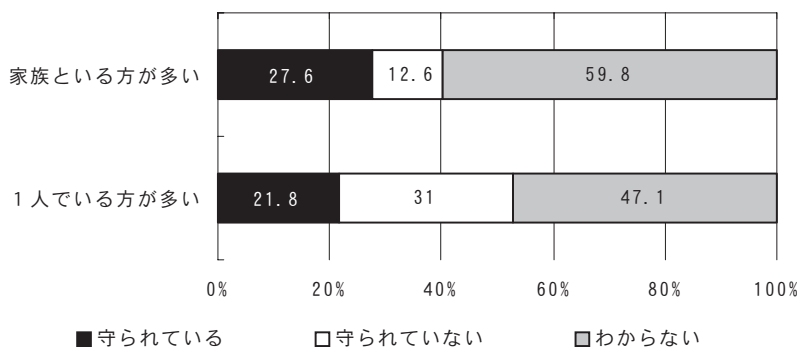


図16 家での過ごし方とプライバシー

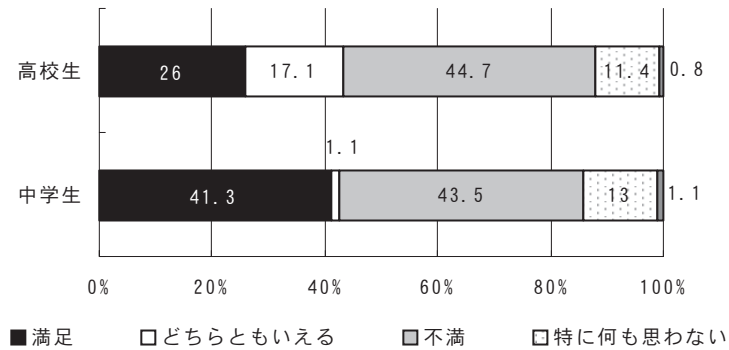


図 17 子供部屋の満足度

ていること、また、家族の持ち物が自分の部屋に置かれていても、それによってプライバシーが守られていないとは思っていないようである。

子ども部屋の満足度については、中学生は満足・不満とも4割と同程度であり、高校生は不満を感じているほうが多い（図17）。最も満足しているところは「落ち着く」、次いで「持ち物」「大きさ」である。不満が多かったのは「大きさ」、次いで「収納」「自分の好みでない」である。鍵の有無は満足度には関係していない。

部屋を与えられた時期が早いほど部屋の現状に「不満」だと答える人が多く（図18）、これには2つの要因が考えられる。①一般的に小さい頃から大きな部屋を与えられる子どもは少なく、成長するにつれて持ち物が増えると手狭になる。②部屋を与えられた時期が遅いほど自分の趣味や思考が取り入れられやすい。

なお、子ども部屋に満足し、プライバシーが守られていると感じている生徒は4割、部屋に不満がある生徒ほどプライバシーが守られていないと感じる傾向が認められた（図19）。

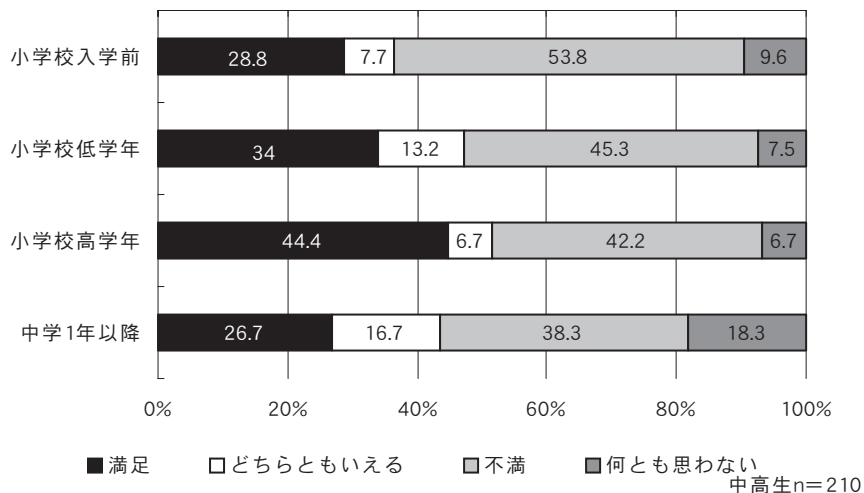


図 18 部屋を与えられた時期とプライバシー＊

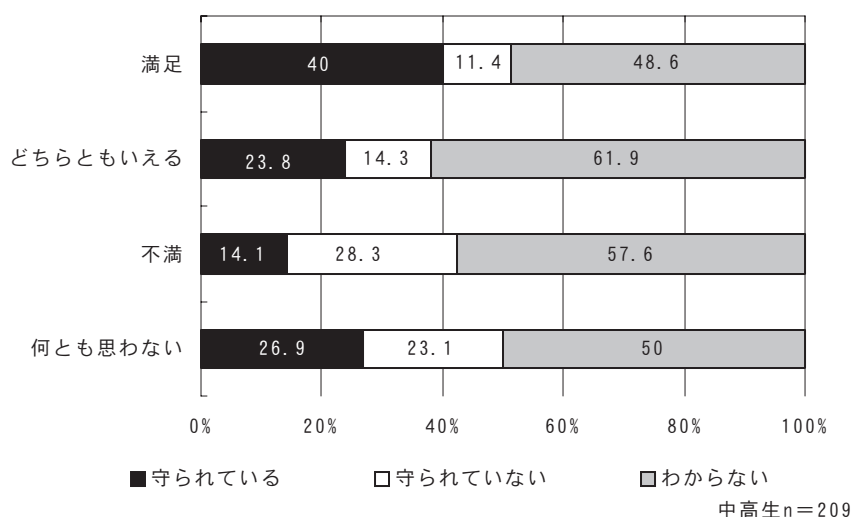


図 19 自室の満足度とプライバシー **

8. まとめ

中高生を対象に、子供部屋がどのように使われ、空間とモノをどの程度家族と共有しているのか、家庭内での家族の交流が子供部屋を通してどの程度行われているのかを明らかにし、プライバシーの意識との関係を探ることを目的に、子ども部屋の現状、子供部屋を与えられた時期、子供部屋における行為、子供部屋の持ち物、部屋の自己管理、家族との関係の自己評価について調査した。得られた結果は以下のようにまとめることができる。

大半の生徒が子ども部屋を保有している。中でも個室の比率は高く、中学生で7割弱、高校生で8割強を占めている。子ども部屋は大半が6畳程度の広さで、小学生のうちに与えられている。全体に、中高生が家庭においてプライバシーをさほど強く意識しておらず、家族に対する拒否反応も強くないことがわかる。高校生のほうがプライバシーは守られていると感じており、また、自分の部屋の現状に満足している生徒のほうがプライバシーも守られていると感じているようである。当然ながら共有部屋の人よりも自分専用部屋の人のほうが、プライバシーが守られていると感じている。1人でいる時間が多いほど、また、不快感において「家族が下着姿でうろうろする」、「不在中家族が勝手に部屋に入る」ことが許せないと答えた人ほどプライバシーも守られていないと感じている。逆に、自分が家のどこにいるのかを家族がわかっている、家族の持ち物が自分の部屋に置かれていても、それによってプライバシーが守られていないとは感じていない。

中学生のほうが自分の部屋の現状に満足しているが、これは学年があがるにつれて持ち物が多くなり収納部分が不足気味だからだと考えられる。

自室の最も満足しているところは「落ち着く」場所であり、ついで「持ち物」と「部屋の大きさ」である。不満が多かったのは「大きさ」、ついで「収納」「自分の好みでない」であった。

過去に行われた住まいに対する評価の調査⁷⁾では、総じて住まいの居心地の良さについて中高生の評価は高く、また自室の満足度の高い評価項目から、自室は中高生にとって非常にくつろ

ぐ場であり、同時に何かを集中して行うときの利用場所としての役割を担っていると推察している。今回の調査結果も同様な傾向にあることを確認した。

子ども部屋を与えられた時期が早いほど部屋の現状に「不満」だと答える人が多く、一般的に成長するにつれて持ち物が増えると手狭になること、部屋を与えられた時期が遅いほど、自分の趣味や思考が取り入れられやすい、などの理由によると思われる。なお、鍵の有無は満足度には関係していない。

9. おわりに

今回の調査で、子ども部屋、中でも個室の普及が相当進んでいることが確認できた。ただし、自宅のプライバシーについて強く意識している生徒はさほど多くはない。家族の子ども部屋への出入りについても拒否反応を示す生徒は少ない。一方、最もプライバシーを要する行為は電話の内容を聞かれることであり、電話、勉強、ぼーっと過ごしたい時には自室が使われている。なお、生徒が「プライバシーが守られている」と感じるのは、「家の中で家族の気配が感じられるかどうか」あるいは「家族の持ち物が自分の部屋に置かれているかどうか」といった状況にあまり関係がない。落ち着いた時間を過ごせる部屋があり、家族とのコミュニケーションが十分とられていけば、家庭におけるプライバシーの評価は高くなる傾向が認められる。高い満足度やプライバシーが守られていると意識されるには、空間の確保と同時に家族相互のありかたが大きく影響するといえそうである。

注記

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：平成 11 年度全国家庭児童調査結果の概要、2001.5
- 2) 竹下輝和ほか：子ども部屋に関する住文化論的考察 その 3、その 4—プライバシー化現象の顕示について—、日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）p.p. 47-48、1985.10
なお、関連文献として、北浦かほる：子供室に関する考察—成長過程において個室の専有度が子供の自立に及ぼす影響—、日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）p.p. 49-50、1985.10 がある。
- 3) 竹下輝和：子供部屋論を見直す、すまいるん、通巻 15 号、pp. 4-7、財団法人住宅総合研究所、(1990.7) より。小学生の段階では自分の持ち物を置く場所としての認識が強く、持ち物の空間の所有意識がまだ希薄であるが、中学生の段階になると「ひとりになれる場所」と認識するようになり、入室制限や自分の部屋を勝手に触られるのを極端に嫌うようになるという。
- 4) 洋室が多いため、部屋の広さを畳数単位で認識できない生徒が多いことから、ベッド、勉強机を配置した 4.5 畳、6 畳、8 畳の 3 つの図を用意し回答を依頼した。
- 5) 日本子どもを守る会：子ども白書 1994 年度版、p. 117 (1993 年実施調査)、草土文化、1994.8
- 6) 日本子どもを守る会：子ども白書 1994 年度版、p. 117 (1993 年実施調査)、草土文化、1994.8
- 7) 松本要詩子、定行まり子：中高生の住まいにおける生活行為・場所と評価—中高生の生活と居場所に関する研究、その 2—、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、p.p. 31-32、2000 年 9 月